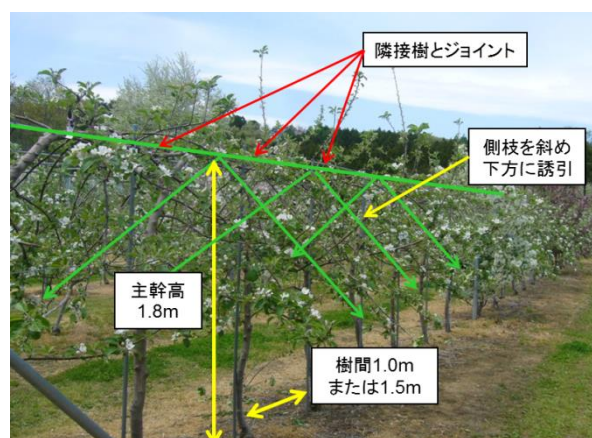
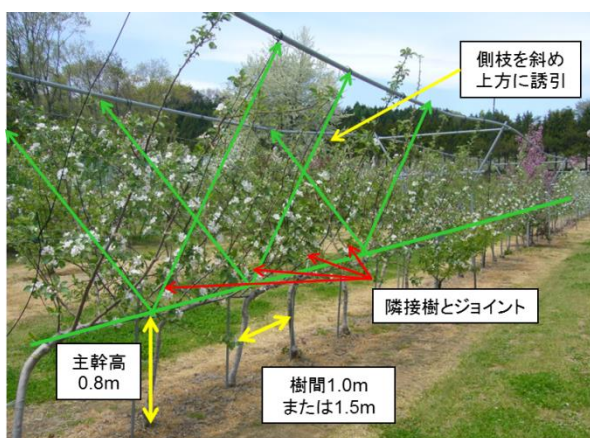


## 低樹高と早期多収を可能にする リンゴ樹体ジョイント栽培

リンゴのわい性台木を用いた慣行の主幹形仕立てでは、一般的に樹高が高く、作業性に支障きたすなどの課題があります。そこで、ナシのジョイント仕立ての研究成果をリンゴに応用し、主幹形仕立てよりも低樹高で、早期に成園化できる技術を明らかにしました。

### ☆ 技術の概要

1. 「ふじ」 / JM7 の2年生苗木を列間距離 4.0 m、樹間距離 1.0 mまたは 1.5 m間隔で植栽し、地上高 0.8 mまたは 1.8 mで主幹部を水平に誘引、先端部を隣接樹の基部と相互に接木（ジョイント）します。
2. その後、当該主枝部から発生させた側枝を、地上高 0.8 mで主幹部を水平に誘引した樹では斜め上方に（「側枝上方誘引型」樹形）、地上高 1.8 mで主幹部を水平に誘引した樹では斜め下方に（「側枝下垂型」樹形）それぞれ誘引して樹形を構成します。
3. ジョイントした樹形は、主幹形に比べて樹高を低く抑え、かつ早期に多収量を得ることができます。特に、樹間距離 1.0 mの「側枝上方誘引型」樹形では、2年生苗木定植後3年目で10a当たり収量は3t得られ、樹高は主幹形に比べて3割低くできます。



### ☆ 活用面での留意点

1. 樹体ジョイントする苗木長は、「側枝上方誘引型」樹形で2m以上、「側枝下垂型」樹形で3m以上確保する必要があります。
2. ジョイント樹形では、主幹形に比べて果実の着色が劣る場合があることから、適正な樹勢の確保や着色管理の徹底を図る必要があります。
3. 側枝を長期間利用するためには、葉数を減らして側枝肥大を制限する必要があります。そのため、6月下旬に側枝上の全ての新梢を概ね基部から5cm程度の位置で摘心します。
4. 6月下旬の新梢摘心後に形成された果枝（「擬似果枝」）に翌年着果させる場合、青実果の発生割合を少なくするため、擬似果枝長が10cm未満、果台長が2cm未満の果枝に着果させます。
5. 詳細については、宮城県農業・園芸総合研究所園芸栽培部  
（電話：022-383-8132、電子メール：marc-fk@pref.miyagi.jp）にお問い合わせください。  
（果樹研究所 企画管理部 研究調整役 岩波 徹）